

IV 海外だより

オーストラリアにおける金融自由化の影響

NLI International Australia
Bruce Robertson
(訳 増田 公彦)

1. はじめに

1980年代はオーストラリアの銀行制度に最も大きな変化があった時代であった。この変化の流れは、1979年フレーザー自由党政権下、オーストラリアの金融制度のあり方を調査したキャンベル委員会に始まった。そして、1983年にホーク労働党政府が選出された後、キャンベル委員会答申が再検討され（マーチンレポート）、本格的な金融自由化、すなわち、制度改革が実行に移された。1980年代の金融制度改革と同意語となった金融自由化（自由化）は、主に、次の4つの点の改革を目指していた。

- (1) 借入・貸出金利規制
- (2) 豪ドルの変動相場制への移行、及び、外国為替取引の自由化
- (3) 外銀16行に対する銀行ライセンスの新規付与
- (4) 準備銀行による銀行の貸出規制の緩和

ここでは、これらの4つの改革により、既存のオーストラリアの銀行（国内銀行）がどう変化し、また、新規参入外銀（外銀）が金融システムにどう影響していったのかという点に焦点を置き、考えてみたい。

2. 自由化の目的

自由化の影響を見ていく上で4つの改革、それぞれが、何を目的にしていたのかを明確にする必要がある。それぞれの改革はそれぞれ異った目的を有していた。

- (1) まず、1982年の借入・貸出金利の上限規制の撤廃は、2つの目的を持っていた。
この上限金利は、市場金利より低いレベルで設定されていたため、銀行借入を受ける人が支払うべきコストの一部を預金者が負担していると言い得る仕組みとなっていた。

第一の目的は、この、いわば見えざる補助金を廃止することであった。第二の目的は、銀行とその他の金融機関との間で、より公平な競争を可能とすることであった。この金利規制は、銀行に対してのみ適用されていたため、金利規制がまったくなく、もしくは、かなり弛やかであったノンバンクが、急速に成長した⁽¹⁾。1960年代には、銀行は全金融資産の80%のシェアを占め、住宅組合のそれは2%であったが、1980年には、銀行のシェアは58%に低下し、住宅組合は11%に増加した。また同時期、マーチャントバンク、ファイナンスカンパニー、貯蓄組合等も大きく成長した。銀行も系列のマーチャントバンク、ファイナンスカンパニーを含めると、連結ベースでは75%のシェアを確保してはいたが、全ての金融機関に統一的な規制が望まれていた⁽²⁾。

(2) つぎに、1983年に入り行なわれた外為取引の自由化は、国内の問題の解決というよりは、むしろオーストラリアを世界の市場の正式メンバーの一員とするということに主眼がおかれていた。外為規制のため、オーストラリアの金融機関は、对外投资を自由に行うことができなかった。この規制撤廃により、オーストラリア全体の对外投资が促進されるであろうという期待がかけられていた。

(3) 労働党左派の強硬な反対を含め、最も導入に対し意見が分かれたのが、外銀に銀行ライセンスを認めることであった。導入推進者の間では大きな期待が抱かれ、外銀が国内銀行に対し、大きな競争をもたらすだけでなく、その他の多くのメリットをもたらすと考えられていた。1979年以降、オーストラリアにおいて、大手銀行間の合併が相次ぎ、大手と数えられるものが、7行から4行に減っていた。この寡占状態の中で、政府は、外銀を参入させることにより、十分な競争状態を生み出そうとした。その他の外銀参入のメリットとしては、次の点が考えられていた。

- ① 内外の資本流出入の増大と、経済効率の向上
- ② 外為市場の拡大
- ③ 雇用機会の増加
- ④ 金融商品の高度化
- ⑤ 貿易関連ファイナンスの容易化と、輸出の促進⁽³⁾

1) "Evolution of Financial Markets in Australia".
The Reserve Bank of Australia Bulletin March 1989 p1.
2) "Aspects of the Reserve Bank's Supervisory Function".
The Reserve Bank of Australia Bulletin March 1990 p10.
3) Foreign Banks in Australia: The Politics of Deregulation
J. Pauly (Australian Professional Publications, 1987)

(4) 4つの改革のうち、最後に行なわれた銀行の貸出規制の緩和は、与信の拡大という点において、オーストラリア経済全体に大きな影響を与えることとなった。1980年代以前には、準備銀行は、銀行の貸出枠を直接コントロールすることができた。しかしながら、法定準備金の段階的解消（オーストラリア国内負債の3%~17%も課していたものが、わずか1%になった）と、プライムアセットレシオ（銀行に対し、一定割合の国債の保有を義務付け）の引下げ（1988年12%→1990年6%）により、準備銀行は、金利政策を除き、銀行の貸出枠を規制する力を失った。この改革の目的は、貸出を準備銀行が規制するものから、市場・銀行自身にコントロールさせることにあった。

全体として、自由化は、金融市場の参加者全員に広範な意味を持つものであり、金融界もこの動きを歓迎した。銀行は、預金獲得・貸出ともに、他の金融機関と同じ土俵で競争できることとなり、マーチャントバンク・住宅組合は、銀行固有分野であった業務に進出することが可能となった。また、外銀も、一般的に非効率と考えられていた、オーストラリアの国内市場へ参入する機会を得ることができた。

3. 自由化の影響

この'80年代の自由化は、単に、金融システムと金融界の収益構造を変えただけでなく、銀行のビジネスのやり方自体にも変化を加えた。1980年以前の銀行間の競争は、価格によるものでなく（預金・貸出金利とも規制されていた）、サービスによるものであった。そのため、銀行は、広範な支店網（大手銀行の一つであるWestpac銀行は、現在でもオーストラリア国内に1,662の支店を持つ）を作り、同時に各種のサービスを行なう子会社を設立した。この結果として、国内銀行のコストは上昇し、OECD諸国の中で、最も割高となっていた。⁽⁴⁾

1979年の銀行間合併により、大手7行が4行となったが、これを契機として、同一地域にある支店の統合など合理化政策が、ゆっくりと進みだした。そして、外銀が参入し競争が激しくなり、更に、競争も価格、金利という、これまでと異なる形態となることが明らかになった後、合理化に拍車がかかり、一層のコスト削除が行なわれるようになった。競争の激化に対する恐怖は、銀行にATM、POSターミナルの設置などの新技術の導入も積極化させた。

1978年キャンベル委員会において、マーチン氏（当時、Commercial Banking Corporation社長）が、外銀の参入について話したスピーチは、この恐れを明確に言い当てている。

4) "Costs and Margins in Banking: an International Survey".
by J R S Revell (OECD, Paris, 1980).

「ついにやってきた。我々は長い間、鎖につながれてきた。そして、もし鎖につながれた犬がいたなら、その鎖を解き放すまで、だれもその犬に向かって、おそろしく、⁽⁵⁾ 獐猛な犬を放しはしないだろう。」

マーチン氏の、外銀を「獐猛な犬」と表したたとは、その後の政治において、新語として定着した。

16行の外銀の参入が認められ、「獐猛な犬」が、オーストラリアに放たれたのは、1985年になってからであった。国内の銀行は、それまで既に自由化の下3年間を過ごしてきており、新しい競争に対する準備はできていた。

1980年代後半は、すべての銀行にとって激動の時代であったが、特に大きな変化があったのは、外銀が積極的に参入した企業貸付の分野であった。それはプライムアセットレシオの段階的な緩和とも重なっていた。この競争激化と貸出規制の緩和は、銀行にとって、危険を孕んだものであった。マーケットシェア拡大指向の中で貸出方針は慎重さを欠くものとなっていた。また、株式市場と不動産市場の高騰は、Bond, Quintex, Hooker, Linter, Girvan等の銀行借入に支えられた企業の成長を生みだした。しかし、この経済ブームが崩壊し、これらの企業が過去の成長を支えることができなくなった後、銀行に残されたものは、過大評価された資産に基づく多額の不良債権であった。

1985年から1989年の貸出競争、資産経済の崩壊、残された多額の不良債権をふり返ると、参入外銀の中には、オーストラリアで銀行ライセンスを取得したことを後悔しているところもあるようである。

4. 外銀の現状

外銀は、リーテル、ホールセールの両分野において、国内銀行から大きなマーケットシェアを獲得できるという、多大の期待を持って、オーストラリアにやってきた。しかし、現在までのところ外銀全体として、当初の彼ら自身の期待、あるいは社会の期待に答える程の成果は残せていないと言えよう。リーテル分野においては、国内銀行に大きな恐威を与えるようになっている外銀は存在しない。国内銀行は、新たな競争に立ち向かう闘争心と、充実した支店網、それに顧客が銀行を変えたがらない傾向のあることなどより、大きなシェアを確保している。外銀は、ホールセール分野に、特に力を注いだが、この分野でさえも、成功しているとは言い難い。たしかに、大企業向貸出において、大きなマーケットシェアを占めるに至ったが、全体として、その貸出の質は高いものではない。1989年、1990年決算で多くの外銀は損失をだした。

5) J. Pauly Op. Cit.

外銀の中で成功しているのは、むしろ投資顧問、コンサルタント業など、フィービ
ジネスに力を入れているところである。

表1が、1985年にライセンスを認められた外銀の最近の収益を総括したものである。

表-1 外銀16行の最近の収益性

(単位:百万豪ドル)

銀行名	税引後利益		コメント
	1989	1990	
Bank of America Australia Ltd.	9.5	(70.7)	・企業貸出に問題有り
Bank of China	N/A	N/A	・支店としてのみの活動であり、数値なし
Bank of Singapore	(1.1)	N/A	
Bank of Tokyo Australia	6.1	10.8	
Bankers Trust Australia	103.4	201.8	・1兆3千億円を超える投資顧問において成功
Barclays Bank Australia	(81)	(117)	・1990年に親会社より1億3千万億豪ドルの再資本投入を受ける。ホールセール分野に問題有り
Chase AMP Bank Ltd.	(30)	(150)	・ホールセール分野に問題有り。リーテル分野においても損失をだしている
Citibank	71.8	(35)	・1990年3月に親会社より、2億豪ドルの再資本投下を受ける。Fairfaxを中心とする企業貸出しに問題有り
Deutsche Bank Australia Ltd.	5.1	N/A	
Hong Kong Bank of Australia Ltd.	(85)	(273)	・Quintex、Bond等、借入れにより成長の後、破産化した企業への貸出が大きい
IBJ Australia Bank Ltd.	7.5	8.4	
Lloyds Bank NZA Ltd.	(27.7)	(61.9)	・企業貸出に問題有り
Mitsubishi Bank of Australia Ltd.	1.3	3.6	
National Mutual Royal Bank	—	—	・ANZ銀行に売却された
Natwest Australia Bank Ltd.	(2)	(94)	・企業貸出に問題有り
Standard Chartered Bank Australia Ltd.	(54)	(61)	・支店機能に業務縮少
合計	(148)	(603.0)	
総資産合計		33,660	

(出典) Annual Reports, KPMG Peat Manwick Financial Institutions Survey, Sydney Morning Herald, Financial Review.

今後、リーテル分野へ力を入れていこうとしているのは、15行中（1行は国内銀行へ吸収済）、1行のみと見られる。Citiバンクは、1993年までに、35の新しい支店を開設する計画である。しかし、Westpac銀行（1662の支店保有）に代表される、国内銀行の支店網に対し、どれだけの影響を与えることができるかは疑問と言わざるを得ない。他のほとんどの外銀は、リーテル分野参入の計画は捨てたようである。

ホールセール分野においても、今後、しばらくの間は、現在保有する不良債権の処理に追われ、新たな展開を見るのは、先のこととなりそうである。

5. 国内銀行の現状

資産の大きさの違い、外銀が特定企業の不良債権を抱えていることにより、外銀の収益性を国内銀行のものと厳密に比較することは難かしいが、いくつかの点を指摘することができると思われる。

表2が、最近の国内銀行の収益を表したものである。

表-2 国内銀行の収益性

(単位：百万豪ドル)

	1989	1990
ANZ Bank	721.7	412.5
National Australia Bank	782.7	767.0
Westpac Banking Corporation	791.1	486.0
Commonwealth Bank	473.0	487.0
合 計	2,768.5	2,152.5 (-22.3%)
総資産合計		391,500

外銀全体の損失が148百万豪ドルから603百万豪ドルに拡大した1989年から1990年にかけて、国内銀行の利益も、22%以上減少した。外銀は設立後5年を経過しており、立ち上がりのコストがかかる時期は既に終了し、国内銀行に収益率が追い含む時期に差し掛かってきているはずであった。しかし、外銀と国内銀行の純資産利益率を調べたレポートによると、利益率格差は、1987年の6.2%から、1988年7.2%、1989年15.3%と広がってきており、1990年の決算では、さらに拡大すると予想されている。⁽⁷⁾

6) "New retail push by Citibank" by Michael Dwyer
Sydney Morning Herald, Tuesday, April 9, 1991.

7) 1990 Financial Institution Performance Survey KPMG
Peat Marwick.

この収益格差につき、2つの理由が考えられる。1つは、国内銀行は巨大なリーテル網を持ち、それを通じて、安い資金を取り入れることができる。次に、外銀の資産構成において、企業貸出占率が高く、それに伴い不良債権が多いことである。

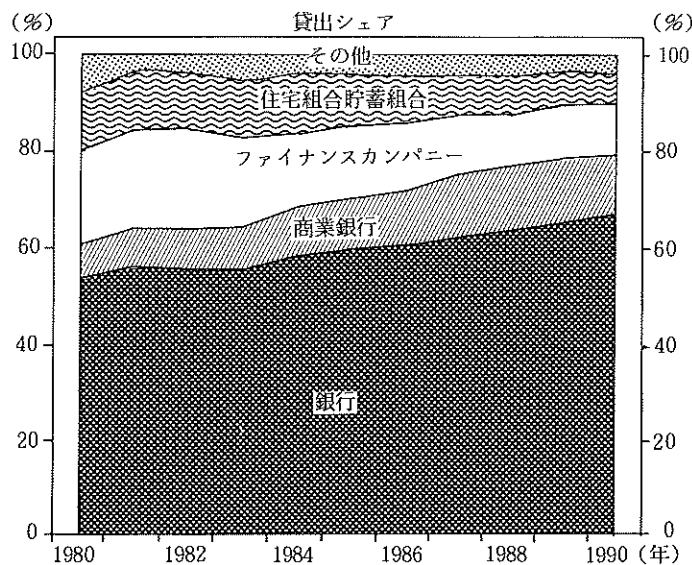
両者の比較において、国内銀行が、外銀より高い収益性を保っているようではあるが、国内銀行も多額の不良債権を保有し、収益も減少している。ただ、外銀ほど収益が悪化していないのは、国内銀行の資産構成で、住宅ローン（リスクが低い）の占率が高く、また、オーストラリアの古くからの優良企業と取引が多くあるためである。

ただ、貸出規制の自由化と、外銀参入によるシェア争いの激化は、これまでのところ、全ての金融機関に、少なくとも収益面において、マイナスに働いている。

また、1980年代は、外銀がオーストラリアに参入した時代であったと同時に、国内銀行が、オーストラリアから海外へ進出していった時代でもあった。オーストラリアから海外への動きの中で、目立ったものとしては、ANZ銀行のイギリスにおけるGrindley銀行の買収と、National Australia銀行のイギリスの地銀の買収が挙げられる（これは比較的的成功しているようにみえる）。

その他、この時代を見る上で注目すべきことは、金融資産全体の中で、銀行がシェアを取り戻したことである。表3からわかるように、1980年に58%まで落ち込んだ銀行のシェアは約10%改善し、1990年には、67%程度となっている。ただし、この期間に、いくつかの住宅組合は一層の発展を狙って、銀行に転換している。

表-3 全金融資産



6. 外国為替

自由化は、銀行業界に競争を持ち込んだだけでなく、新しい業務の機会も与えた。そのうちの 하나가、外為業務であり、外銀、国内銀行を問わず、ほとんどの銀行が、この分野に参入した。しかも、この新しい市場は世界の貿易産業界において、オーストラリアの位置付けを変えるものであった。そして、現在ではオーストラリアドルは最も取引量が多い通貨の一つとなり、オーストラリアの企業も、広く海外進出を行うようになった。

7. まとめ

自由化は確実にオーストラリアに競争を持ち込んだ。しかし、不良債権の増大という問題も引き起こした。一般のオーストラリア人にとっては、金利自由化によって、直接的には、プラス、マイナス両方の側面があったと考えられる。預金に高い金利が付くようになった一方で、住宅ローンも完全に市場金利に連動するようになったため、高金利のピーク時には、住宅ローン金利が、17%に達した。

また、資金借入企業にとっては、借入金利や市場金利とのマージンが、銀行の内部事情によっても変化することとなり、現在のように、銀行が多額の不良債権を抱えている状況下では、必要以上に大きいマージンを支払わねばならない事態が生じている。

自由化は、数多くのプラスの変化ももたらした。たとえば、国内市場における競争により、国内銀行は、以前は、存在しなかった（もしくは取り入れようとしなかった）進んだ商品を取り入れ、機械化などの技術革新にも積極的に対応した。また、外為市場の開放は、国内だけでなく、国外においても競争できる機会を作った。金利規制の撤廃は、銀行が他の金融機関と対等に競争できるようにし、金融機関相互のイコールファンディングを生み出した。

自由化のもたらした変化と影響を、数量的に測定することは、不可能であろう。そして、それができない以上、自由化が成功であったのか、失敗であったのかを判定することはできない。しかし、1980年代にオーストラリアの金融制度は確実に変化したとすることはできる。そして、その変化は、あと戻りすることのない変化なのである。